第 11 回赤松小三郎講演会に参加して

原田義則(3 組)

11 月 4 日に上田高校関東同窓会の赤松小三郎研究会が主催する第 11 回赤松小三郎講演会が日比谷図書文化館で開催されました。事務局によれば出席者は 166 名、うち同窓生は 53 名だったそうで、先駆者赤松小三郎への関心が広まりつつあるようです。また、信濃毎日新聞社他、マスコミからの取材もあった模様です。尚、同期の出席者は上原君(2)、丸山君(4)、布施君(6)と報告者の 4 名。

今回の講演会の目玉は TV 出演も多い前法政大学総長で江戸文化の専門家である田中優子氏（和服姿での出演で有名）による「赤松小三郎からみた江戸時代」の講演で、彼女の講演を聴くために集まった聴衆も多かったようです。

講演では赤松小三郎や吉田松陰のような先駆的指導者が生まれる背景となった江戸時代の武士と庶民の教育システムに焦点を当てて解説してくれました。語られた内容は盛り沢山で要約は難しいのですが、印象に残った要点は以下の通りです。

1. 農民を含めた一般庶民での寺子屋での高い就学率(江戸府内で 70-86%！)に関して、多くの教師（師匠）は「職業ではなく、給料無しのボランティア」で、通う子供（の家庭は）は金銭ではなく家で採れた野菜などを含む「お礼」をして通わせていた。
2. 「寺子屋は楽しい所」で子どもたちが通いたがった場所だった。
3. 年長の（理解の進んだ）子供が年少の子供を教える協同学習システムが導入されていて、師匠は個別指導が中心だった。手作り教育の実践。

現在、一般的に行われている教師による所謂一律教育体制の先を行くシステムだったようで、驚きました。因みに現在も大学院で授業をしている筆者の教育方針は、こうした江戸時代の寺子屋方式に近いものです。尚、使われた教科書は手紙文を主体とした往来物（共通語・標準語で書かれていた）で、実生活にすぐ使える内容だった他、算術が重要視されていたことも驚きでした。

武士階級の教育でも（藩校のような公的機関ではどうだったのか分かりませんが）私塾では同様の教育システムだったようです。こうした中で知識の蓄積と議論する能力、議論を通じで考える力が養われ、幕末において、清がイギリスに侵害されている事を知った人達は「日本を何とかしなければ」と言う意見を持つようになり、保守的な幕府上層部の考え方に強く反発する考え方が醸成されたとのことでした。

赤松小三郎が提唱した選挙を基本としたかなり先進的な議会民主主義などの政治体制も欧米のまねではなく、江戸時代の民意反映方式である「入札」などをベースにした考え方であるとの見解も披瀝されました。

「江戸時代は暗黒の封建主義時代」と言う明治政府が自らの先進性・優位性を強調するために導入したイメージが長らく日本を支配していたが、どうもそうでは無かったことの事例が幾つも紹介され、眼から鱗の落ちる感じがしました。

また、儒教、就中朱子学が日本を悪い方向に導いたと主張する人達も多いのですが、パネルディスカッション中の田中氏の「儒学は本来は合理的な考え方からなる体系であり、多くの人が誤解している」との発言にも深い洞察を感じました。

江戸時代は「意見を述べる事は命懸けだった」との指摘もありました。実際、一揆の首謀者は悉く死罪になる。また武士も意見を述べる時には命を賭した覚悟を持って行動する（実際、赤松小三郎も暗殺されている）ことが常識でした。それに比べて、屁理屈・言い訳・言い逃れがまかり通る今の日本とは、随分と違う世の中だったのかと思わせられた講演でした。

パネルディスカッションの後の演者と会場との質疑応答では真面な質問も幾つかはありましたが、赤松小三郎には興味はなく、田中氏の顔を見るためだけに参加したご仁や、徒に数々の自分の意見をダラダラと述べるご仁が多く、一寸興覚めでした。しかし、流石、前法政総長、上手く纏めてお開きとなりました。

以上

2024 年 11 月 5 日　記